

「真面目ぶってるサキュバスはつけ〜ん」

「確保〜」

「捕獲〜」

「拉致監禁〜」

「身代金〜」

「遺体遺棄〜」

「こらこら」

エロ系種族の代表格・サキュバスらしき人物を発見し突撃しようとしたオクトガルを、慌てて春菜が止める。

本日の、というよりこれからの行動に、サキュバスの存在は一切関係ない。それ以前に、サキュバスが真面目にルーフェウス学院で勉強に励んでいることに対し、春菜達が文句をつける理由など一切ない。

「知らない人にいたずらしようとしちゃだめじゃない」

「知ってる人ならいいの〜？」

「だめって言っても聞かないでしょ？」

「本当にだめならしないの〜」

「だったら、知らない人には絶対だめ」

「分かったの〜。知ってる人だけにするの〜」

「知ってる人でも、本来はだめなんだよ？」

春菜の注意に聞く耳を持たず、何やら不思議な動きをするオクトガル達。

その様子に、知らない人にさえ手出ししなければいいか、とあきらめのため息をつく春菜。頭を切り替え、今日の仕事に意識を向ける。

「今日はこのアンケート用紙を配って、学食に対する率直な意見を集めるのが仕事。そういうのは全部終わってから、ね」

「は〜い」

「了解〜」

「配るの〜」

「遺体遺棄〜」

春菜から受け取ったアンケート用紙を手に、二匹ほど残して方々に散っていくオクトガル達。一抹の不安を感じながらもそれを見送り、春菜も自身の割り当て分を配り始める。

昨日学食の料理を試食して、翌日にはアンケートである。いきなりな上に春菜にしては焦りすぎのような行動に見えるが、料理長や料理人の態度を見ると、最低限これぐらいのことをしてからでないと話し合いすら成立しないと察してのことである。

つまり春菜は、最初から宣戦布告をする気満々で今回の件に当たっているのだ。

「ただいま学食改革のためにアンケートを実施しています。ご協力ください」

「ご飯がおいしくなるかもなの〜」

「目指せ三ツ星なの〜」

「清き一票を〜」

春菜に合わせて、オクトガル達もチラシを配り始める。その言動がどんどん明後日の方向に流れているのは、いつものことなので気にするだけ無駄である。

「アンケートねえ」

「こんなもんで、あの最悪に不味くてサービスの悪い学食がまともになるのか？」

アンケート用紙を受け取り、その場でざっと記入しながら、懐疑的な態度を隠そうともしない学生達。それも当然といえば当然で、これで改善されるようであれば、とうの昔にクレームなどなくなっている。

「まあ、これだけでまともに、つていうのは、多分無理だろうね」

その疑問に対しては、残念ながら春菜自身も同意せざるを得ず、苦笑しながらアンケートの意義を否定するような言葉を普通に口にしてしまう。

「でも、こんな物でも、数が集まれば足がかりにはなるから、まったく無意味ではない、はず」

「頼りないなあ……」

いまいち頼りない春菜の言葉に、あきれたように肩をすくめつつ回答用紙を提出する学生達。その間にも、オクトガルが次々とアンケート用紙を配っては回収していく。

「協力してくださいさる方で、今、回答する時間がない方は、あとでフルート教授に提出してください」

「じゃあ、東でもらつていつていいか？ 多分時間なくてスルーした連中とか、そもそもアンケートの存在を知らないやつとか結構いるだろうしな」

「だったら私ももらつていく。今日は講義がない子とか結構いるから、そつちにばら撒いとくわ」  
「ご協力、ありがとうございます」

春菜の補足説明を聞き、幾人かがそんな風に協力を申し出てくれる。そんな彼らに頭を下げ、三枚ほどのアンケート用紙の束を預ける。

「まあ、これぐらいは大した手間でもないし、あの学食に腹を立ててる子はいっぱいいるしね」

「あんまりあてにはしてないが、何もしないよりはましだろうしな」

そんなことを言いながら、受け取ったアンケート用紙の束を手を急ぎ足で講義に向かう学生達。

オクトガルの奮闘もあり、なんだかんだで初日から五百枚を超えるアンケートの回収に成功する春菜であった。

☆

「すみません。ちょっと時間もろてええですか？」

「なんででしょうか？」

春菜がオクトガル達とアンケート用紙を配っていたその頃、宏は学院長の許可証および委任状を手に、購買部に顔を出していた。

「僕はフェアレーンでアズマ工房ちゅう工房やつとります、東宏つちゅうもんです。この度、ルーフェウス学院改革の一環として、この購買の改善を任せられます。これ、各種書類です」

「は、はあ……」

妙な訛り方でとんでもないことを話す宏に対して、戸惑いと警戒をあらわにする購買部の担当者。差し出された書類に目を通していくうちに、その表情が変わっていく。

「……どうやら、本当のようですね」

「そら、書類偽造してまでこんな真似するほど暇やありませんで」

宏の言葉に、思わずため息が漏れる担当者。実際にはそんなに売り上げも利益もないとはいえ、ルーフェウス学院の購買部というのは、外部から見れば不正をしても乗っ取りたいと思わせる程度には魅力的な部署である。

だが、宏的にルーフェウス学院の購買部は、というより、末端の小売業態に属する組織は、商売の面においてはそれほど魅力的なものではない。

工房で直接働く職員を増やすことすら、いろいろしがらみがあつて簡単にはいかないのが現状だ。そこに大量の人手が必要で、売り上げも在庫もきっちり管理しなければならず、挙句の果てに余計な敵を増やしかねない小売業にまで手を伸ばす余裕などない。

第一、わざわざ小売りを直接やらずとも、あちらこちらの商會が勝手に値段を釣り上げて仕入れていき、勝手に高値で売ってくれてるのだ。宏達が直接利益をむさぼろうとしなくとも、十分すぎるほどの金が入ってくる。

担当者もある程度アズマ工房の噂は耳にしており、そのあたりの事情も噂程度では耳にしている。真偽のほどは分からないが、宏の言葉が嘘ではないことはなんとなく理解できていた。

「……学院長とフルート教授の連名で発行されている書類ですので、信用することにします。ですが、なぜわざわざこの購買に手を入れるのか、それが理解も納得もできません」

「最初に言うたとおり、ルーフェウス学院の改革の一環ですわ。いきなりデカイことしようとしても、まず上手いこと行きませんで」

「いきなり大きなことからやるのは無理、というのに分かります。ですが、購買を変えたくらいで学院全部の改革につながるなんて、とても思えませんね。そもそも、今の購買部に、手を入れる余地なんてあるんですか？」

「そらもう、僕の目から見たら改善できる場所は山盛りありますわ」

山盛りある、と言われてかなりむっとした表情を浮かべる担当者。今まで購買の品揃えとかそういったことに対しては、直接的には彼が全ての権限を握っていた。その購買に山盛り改善すべき箇所がある、というのは、言ってしまうえば今までの彼の仕事を全否定しているのと大差ない。

高齢を理由に学院から退いた前任者から引き継いで五年。ずっと真面目に手抜きせずに続けてきた仕事を、いくら西部の三大国家で高い名声を得ているとはいえ、どこの馬の骨とも知れぬ若造に否定されたのだから、怒って当然であろう。

だが、宏の突っ込みはかなりの確で厳しかった。

「たとえば、この学校フィールドワークも結構あるつちゅうのに、雑貨屋でも扱える等級外ポジションすら置いてませんやん。医務室があるから問題ない、つちゅう話かもしれないですけど、講義とか実習とかで使うもんぐらい、購買でちゃんと揃うようにしとかんと片手落ちでつせ」

宏に突っ込まれ、反論に詰まる担当者。実際、腕のいい医者と高度な薬と治療系魔法の使い手が医務室に揃っており、別に等級外ポジションが必要ないと思っていたのだ。

もつと正確に言えば、等級外ポジションが売り物にないこと自体、まったく意識していなかった。

「一応カリキュラムその他を確認したんですけど、不正防止の観点からフィールドワークの時には  
医務室からは薬の支給・販売はなし、必要なら各自で用意するそうですから、やつぱり等級外ポー  
ションぐらいは置いとく必要がありますやん」

「確かに、そうですね……」

学内の誰一人おかしいと思わなかったとはいえ、学業に必要なものが揃っていないかという事  
実にうなだれてしまう担当者。これでは、いくらでも改善の余地があると言われても反論できない。  
「ほかに、パン置くんやつたら飲料水か水筒ぐらいい置いといたほうがええんちゃうか、とか、  
パン自体も同じ黒パンやつたらこんなくそ不味いやつやのうてもつとましな置かれへんのか、と  
か、言い出したらキリありませんわ」

「確かにそうですね。ただ、黒パンに関しては、こちらの管轄ではなくどちらかと言えば学食側の  
管轄ですので、購買部の判断で仕入れ先を変えるのは難しいんですよ」

またしても、痛いところをついてくる宏。だが、飲料水や水筒はともかく、パンについては思っ  
ていて身動きがとれなかった部分なので、先ほどに比べれば担当者のダメージは少ない。

「パンに関してはまあ、そんなとこやと思っちゃいましたわ。仕入れ先の変更はできません、注文自体  
は勝手にやってもうてええんですよね？」

「ええ。ただ、非常時に備えた備蓄用の食料という側面もありますので、あまり高級なものや突飛  
なもの、腹にたまりにくいものは扱えませんが」

「そのへんは問題ありません。折角のルーフェウス学院やし、商品開発すればええんです」  
いきなり恐ろしい発想を見せる宏に、思わず絶句する担当者。確かに担当者にはそれが可能なだ

けの権限が与えられているが、この学院にいる人間は基本的にほぼ全員、食に関しては完全な門外  
漢だ。パンの商品開発なんて、ノウハウどころかとっかかりすらない。

「あの……」

「言いたいことは分かります。食いもの商品開発はうちの専門の一つやから、これに関しては  
看板と意見だけくれたら問題ありませんで」

「……そこまで言う、ということは、アイデアはあるわけですか？」

「そもそも。うちの故郷やと、購買部がある学校は大概パン売つとるんですわ。そんな中でも定番  
つちゅうやつのうち、ルーフェウスでも受けそうなんを何種類か作ってみよか、つちゅう感じです」  
宏の言葉に、どうやら最初からすでに、ある程度予定や目途が立っていることを悟って戦慄する  
担当者。顔に覚えがないところを見るに、恐らく購買に顔を出したのは一度か二度のはずなのに、  
それだけで問題点を全て見抜いているところは、驚異以外の何物でもない。

「でまあ、そつちのほうは許可さえもらえれば僕が勝手にやつとくとして、それとは別に、折角や  
から増やしたほうが便利ちゃうか、つちゅうサイズのノートとか紙とかあるんですわ。そつちのほ  
う、試しに開発してみてもええませんか？」

「へえ？ それはどんな大きさですか？」

「これのちょうど半分ぐらいのやつと、さらにその半分ぐらいのサイズですわ。うちの故郷やと、  
半分のやつはレポートとかチラシに、さらにその半分のやつはメモ帳によく使われてますねん」

「なるほど。確かに言われてみれば、四分の一の方は持ち運んでメモを取るのにちょうどよさそう  
ですね」

宏が提示した紙のサイズに、小さく頷く担当者。

因みに、宏が提案したサイズは、地球でいうところのA4とA5に相当するサイズになる。

これまでルーフェウス学院の購買部、というよりルーフェウス全域では、基本的にA3以上かB5かのどちらかが主に使われており、今までこのサイズは、少なくとも市販の用紙にはなかった。

なぜ市販されてこなかったかの理由は単純で、なんだかんだといったところでこのルーフェウスですら製紙業自体まだ歴史が浅く、生産効率の都合でそんなに多種多様な用紙を作るには至っていないのだ。

さすがにA3とB5しかない現状は使う側も不便を感じているが、大きいなら自分で折るか切るかすればいい、という感じで商品化の要望にまでは至っていない。

こういう小さな不便というのは、きつかけがなければ意外と表面化しづらく、目端の利く人間が商機を嗅ぎ取って行動するまで需要があるとは気づかれにくい。

結果、羊皮紙ではない紙の大量生産が行われ始めてから約半世紀の間、紙の用途は大いに広がり需要も爆発的に増えたものの、最初に作られたA3とB5のサイズに合わせて使われるばかりで、新たなサイズの紙を生産する発想には至らなかったのだ。

「ついでに、メモ帳にするんやったら一番裏に薄い木か厚手の紙つけとくと、机とかなしでもメモできて便利ですわ」

「なるほどなるほど」

宏からもたらされるアイデアに目を輝かせる担当者。いろいろと目から鱗が落ちる思いである。

「とりあえず、商品開発つちゆうても、ぶっちゃけ今の話みたいに、あつたら便利とかその程度の

話ですわ。設備投資して、とかまでいったら大事なりますけど、試作するぐらいやつたら案外簡単なものやつたりします」

「……確かにそうですね」

宏に言われ、真剣な表情で頷く担当者。実際、試すだけなら意外と簡単だ。特に用紙のサイズなど、裁断機を借りて規定のサイズに切ってみればいいだけなので、各二百枚程度であれば本当に大した手間でもない。

余談ながら、この世界にも原始的な裁断機は存在する。構造的には紙を揃えて固定する板に、てこの原理で裁断するための取っ手がついた大きな刃物を取り付けられているだけのものなので、結構腕力が必要になる。

そのため、サイズと形を揃える製紙工場の作業はなかなかの重労働で、どうにかして水車などの動力で省力化できないかと日夜研究開発がすすめられている分野でもある。

アズマ工房だと、とつとと魔道具を作って高速化するパターンだが、普通はこの種の細かいことのために、わざわざ魔道具を作ったりはしないのである。

「まあ、そういうわけやから今更の確認ですけど……」

「なんででしょうか？」

「みんなで一緒に、このやる気のない購買部の改革つちゆうやつ、やりませんか？」

「もちろんです」

宏の実に今更な問いかけに、担当者がいい笑顔でそう答える。

こうして、一人の男が発明という名の荒野に足を踏み入れるのであった。